3 算　数　科

山田　恵次・奥　　金実・松浦　武人

1．個が生きる授業と自己を高める評価力

個が生きる授業は，児童が主体的に学習に取り組んで自分なりの考えを持ち，その考えを集団で比較・検討してそのよさを明らかにしながらよりよい考えに高め，さらに，自分の取り組みを振り返ることにより自らの高まりを実感することができる授業，つまり個が自らの高まりを実感しながら高まっていく授業であると考える。しかも，「個を生かす」でなく「個が生きる」であるから，人に高められるということよりも自らが自己を高めるという姿を求めたい。

自らが自己を高めるためには，まず，今（まで）の自分の姿を確認（評価）し，その後のよりよい自分の姿をめざした具体的な活動を起こすことが必要となる。この自己を高めるための具体的な活動を起こす原動力となるものが自己を高める評価力であると考える。

このような自己を高める評価力は，自分の活動を高める原動力となるべきものであるから，学習過程のどの段階においても必要となる。また，自己評価が中心となるが，より客観的な自己評価とするためには他者にされる評価も重要となる。さらに，他者に対する評価も自己を高めることに結び付くようにしたい。そのためには，他者のよさに目を向けた評価を行うことが望ましい。

2．自己を高める評価力を育成する授業づくり

(1)　単元レベルでの評価計画の構想

毎時間の授業において関心・意欲・態度から数学的な考え方，表現・処理，知識・理解といった全ての観点で自己を高めることをねらうと無理が生ずる。学習内容から育てられる学力を考察し，それに基づいて重点をおいた評価の計画を単元レベルで構想しておきたい。

(2)　単元時間レベルでの学習過程と評価

自己を高める評価力を育成する学習過程と評価のあり方については，基本的には以下のように考えるが，学年や児童の実態を考慮した授業づくりを行うようにしたい。

① これまでの学習の想起

↓ 本時の学習に関連する事項について必要に応じて想起し，本時の学習への構えをつくる。

② 学習のめあての把握

主体的に取り組めるよう，望ましい学習のめあてを設定する。

- 興味・関心が感じられるもの
- 必要感が得られるもの
- 生活や既習事項と関連しているもの
- 多様な解決方法や解決水準があるもの
- 具体的な操作活動が取り入れられるもの

③ 解決の見通し

前時までの問題との比較や，前時までの取り組みの振り返り（評価）により，解決方法などについての見通しを持つことができるようにする。

・学習の内容，方法，意欲・関心・態度などの振り返り
・ノート等への記述内容（自己評価内容）の紹介
・解決方法の見当
・自分の取り組みのめあて

④ 自力解決

自己評価しながらよりよい考えを追求することができるよう，自己評価基準を設定しておく。以下の基準は，高学年に示したものであるが，学年に応じて，また同じ学年でも児童の実態に応じて作成する必要がある。

1　自分の考えが持てる。
2　どのように考えたか表現できる。
3　別のよいと思われる方法で考える。
4　自分の複数の考えを比較・検討する。

⑤ 集団解決

個々の考えを出し合い，比較・検討することにより，考えのよさを明らかにしながら（自己評価，相互評価しながら）よりよい考えに高める。集団解決を高めるための評価基準の活用も考えられる。

・評価の観点…簡潔，明瞭，的確，一般性，独創性など
・評価の基準
　1　分からないことが質問できる。
　2　自分の考えを発表できる。
　3　共通点・相違点に気付く。
　4　考えのよさに気付く。

⑥ 振り返り

自分の高まりや不十分なところを確かめる。（自己評価）

・類似問題の解決
・感想の記述

〈参考文献〉
安彦　忠彦　「自己評価」　図書文化社　昭和62年